

令和2年度（2020年度）

HUMAN RIGHTS REPORT

ヒューマン・ライツ・レポート

（箕面市職員による人権課題に関するレポート）



このレポートは、箕面における人権課題を学び、実態を知ることで、市民と職員が共通認識に立ち、お互いの情報を共有して、それらを広く伝え、人権文化のまちづくりを共に考えていくことを目的として、箕面市職員による人権行政研究会が編集しています。

今年度は、世界的に新型コロナウイルスが流行し、日常生活が一変しました。誰しもの大変な思いをしましたが、そんな中でも障害者、外国人市民は特に大変なことが多かったのではないかと。そんな思いで、当事者のかた、当事者を支えるかたにインタビューを行い、見えてきたことを含めてまとめました。

取材・レポートをとおして知ったこと、考えたことを、家庭・職場ほか、さまざまなコミュニティへ持ち帰り、それぞれの場で今後の情報発信に活かしていただければと考えています。



— 目 次 —

はじめに		1
 <u>コロナ禍における障害者市民のくらし</u>		
市民や事業所からの相談などはどうだったのか？		2
障害のある職員が健常者と共に働くということ		7
コラム1 健常者と共働する ～自分から発信することの大切さ～		12
コラム2 健常者と共働する ～聴覚障害のある職員からみて～		13
 <u>コロナ禍における外国人市民のくらし</u>		
箕面市国際交流協会から見た人権課題		18
外国人市民インタビュー		22
コラム3 新型コロナウイルスの3つの顔を知ろう！ ～負のスパイラルを断ち切るために～		40
編集後記		43
箕面市人権宣言、箕面市非核平和都市宣言		44

はじめに

◇令和元年12月、中国で最初に確認された新型コロナウイルスの感染者はまたたく間に世界中に広がり、世界各国が様々な対策を行っていますが、発生から1年を経過した今なお、収束の兆しが見られません。

◇日本では令和2年2月に全国の小学校、中学校、高等学校に臨時休校が要請され、4月7日には東京、神奈川、埼玉、千葉、大阪、兵庫、福岡の7都府県を皮切りに全国を対象に緊急事態宣言が発出。「ステイホーム」「3密回避」が推奨され、まちから人が消えました。

◇学校が休校になったことで、子どもたちを家でみるケアワークを誰が担うのか？テレワークが推奨され在宅時間が長くなったことによるDV被害者の増加。コロナウイルスに感染したかたや、医療従事者に対する差別や風評被害。感染予防対策を守るために行きすぎた行動を取ってしまう「自粛警察」。失業率の増加。未曾有のウイルスの影響で、2次的、3次的に様々な問題が発生しています。

◇今年度、人権課題を考える、この「ヒューマンライツレポート」を作成するにあたって、『新型コロナウイルスの影響は無視できない』という思いが編集委員である人権行政研究会のメンバーにはありました。

◇「非常時には平時に隠れていたものが表面化する」とよく言われます。誰しもが新型コロナウイルスの影響で大変な思いをしましたが、そんな中でも障害者・外国人市民は特に大変なことが多かったのではないだろうか。そんな思いで、当事者のかた、支援者にインタビューを行いました。



コロナ禍における障害者市民のくらし

市民や事業所からの相談などはどうだったのか？

(障害福祉室・地域包括ケア室)

◎障害福祉室・地域包括ケア室職員に聞きました。

障害福祉室・地域包括ケア室は、障害者手帳の交付に関することや、障害福祉サービスの支給に関すること、障害者の権利擁護に関することなど、障害者の福祉に係る業務を担当しています。

●コロナ禍の影響で、相談の増減や内容に変化はありましたか。相談の多かった内容やその対応についてお聞かせください。

*通常時に比べて相談数に大きな変化はありませんが、例えば支援学校や地域の学校が休校になったことで、本来であれば学校に行っている時間帯に支援が必要になったためサービスの追加をしたいという相談がありました。このようなサービスの相談は児童生徒に限らず、通所施設も一時的に閉所もしくは休所、時間短縮する所があったため、その利用者から他のサービス調整等について相談を受けることがありました。

*障害当事者の団体さんからは、コロナにかかったらどうしようという不安の声が寄せられています。実際に入院させてもらえるのか、PCR検査を早く受けさせて欲しいという声をいただいています。

*障害者のご家族からすれば、「自分がコロナになってしまったら、誰が支援をしてくれるんだろう？」「障害のある家族がコロナになったらちゃんと入院させてくれるんだろうか？」というところがご不安なのだと思います。「コロナになったらこう対応する」という具体的な情報を求めておられるのだとは思いますが、実際にはそのかたの状況に合わせてサービスを調整するといった個別ケースの対応になります。

*例えばグループホームでは障害者がみんなで共同生活をしていますが、もしそこで感染が起こったらどうしようと言う声を聞いています。また、日々ヘルパーを使っておられるかたからは、主な介護者である家族がコロナに感染したら、また本人が濃厚接触者になったら、陽性になって在宅療養になったら、ヘルパーさんは入ってくれるのかという不安の声は聞いています。

サービス継続 ↔ 家族の心配

*サービスを継続しないと生活が成り立たなくなきますので、感染防止対策をきっちり取った上できちんとサービス継続をしてくださいという通知が厚生労働省から出されましたので、市としても事業所にそれを周知してお願いをしています。ですが、事業所側がヘルパーを派遣できないというよりも、ご家族やご本人が感染を懸念して、家族で介護したり通所を控えたりということが4月5月にはよくありました。具体的には、一人で移動をすることが困難な障害者のかたが、ガイドヘルパーさんと一緒に外出をする移動支援というサービスがありますが、緊急事態宣言中は外出自粛が求められていましたので、外出を控えられているかたが多かったと聞いています。



●相談への対応や手続き等で、通常時の対応ができずに困ったことはありましたか。別の方法での対応等、工夫したことがあればお聞かせください。

*予約なく相談に来られる場合もあるので、感染対策に配慮しながら相談を受けていました。感染への不安感から電話相談を希望するかたもいらっしゃると思いますが、初期相談時は対面せず電話だけで全ての事を聞き取るのは難しいと感じるところもあり、基本的には対面での相談が望ましいと思います。今は相談室の中に飛沫防止パネルが設置されており、換気などに気をつけて対応しています。



*障害者手帳はご本人の身分証明書にもなるので、市役所（ライフプラザ）に取りに来ていただくのが原則ですが、外出自粛期間をご希望のかたには郵送対応

をしていました。通常は手帳交付の際、医療証や国保の手続きなども行い、サービスの説明もその場でするので、新規のかたと1時間弱かかることもありますが、それを全て郵送して電話で説明することになったので、窓口で対応するよりも時間はかかったと思います。

●人々の意識や行動の変化が、障害者のかたや関わるかたに影響をあたえていると思われる相談や情報はありましたか。

顔が見られる

*関係者同士の会議は参集して開催することが通常でしたが、コロナ禍の中でオンライン会議を開催する環境が整ったというのは大きな一歩だと思います。今までも関係者から「災害時などを想定して、参集しないような形で情報交換、情報共有できる場を設ける必要があるのではないか」という声も上がっていたので、コロナをきっかけにそれができる環境になりました。障害福祉サービスの現場では、サービス等の調整をされているかたがサービス利用者のかたにお会いするモニタリングなどもオンラインで実施している事例があります。ご本人の状態を把握するには直接会ってお話を聞くのが一番だとは思いますが、実際に会うのが難しい状況で、電話の音声だけでなく顔を見ながら会話するツールが使えるのはいい面なのかなと感じています。



参加しやすいオンライン

*基礎疾患があり、今まではなかなか会議への参加が難しかったかたが、オンラインの会議になってからはほぼ毎回参加いただいております。そういう面では社会参加の手段として一つ選択肢ができたのは良かったかなと思っています。

聴覚障害とマスク

*あとは感染防止のためのマスク着用が定着したことで、聴覚障害者のかたが相手の口の動きが読みづらくなったという声を聞きます。市では透明マスクを調達して登録手話通訳者さんにもお配りしました。聴覚障害のかたは口の動きを読むということが、世間のニュース等でも知られるようになったのは良かったかなと思っています。聞いた事例では、

聴覚障害のかたの通院に通訳者さんが同行した際、透明マスクをしていくと、病院のかたから「ちゃんとマスクをしてください」と言われたことがあったらしいです。一般的なマウスシールドと勘違いされることもあるようですが、良いものであればきちんと飛沫を防げるようになっています。その時は、通訳者さんから当事者さんに「病院からこう言われたんですけど、普通のマスクをしていいですか」と尋ね「いいです」と許可をもらったので、通常のマスクに変えて通訳をされたと聞いています。障害特性の理解という面ではまだまだなのかなと思いました。



●コロナ対策のために、以前のままでは対応できなくなったことなど、課題があれば教えてください

*感染防止のためにマスクをしないといけないけれど、知的障害のために理解が難しいかたもいて、感染防止対策をしながらサービス提供をするのがなかなか難しい、という現場の声は頂いております。マスクすることが不快になるかたもいらっしゃると思いますし、必要性が理解できないかたもおられると思います。密にならない、マスクをする、手洗いをするという「新しい生活様式」が求められていますが、障害者にとって「新しい生活様式」というのは、なかなか難しいところだと思います。



*あとは障害福祉サービス事業所から、サービス利用が減ったことで収入が減っているという相談を受けています。令和2年8月に実施した事業所向けに実施したアンケートにおいても前年と比較すると収入は減り、なかなか経営が苦しいという意見を聞いています。4～6月は、緊急事態宣言で外出自粛となったので、事業所がサービスの提供時間を短縮したり、一部ですが閉所しているところもありました。外出をしないのであればガイドヘルパーの収入が入らなくなります。ただし国では、例えば通所事業所に来なくても、在宅で同じような支援をしたら報酬対象としてよいという通知を出していて、できるだけ柔軟に報酬の支払いはできるようになっています。

*利用者やご家族の感染予防の意識に差があるので、ヘルパーとしては感染予防対策を徹底してサービスを提供したいけれども、なかなかその理解が得にくいという声もありました。不要不急の外出の判断が難しく、利用者によっては外出を控えて一切サービス

を使わなくなるかたもいれば、これまで通り外出する人もいます。ルーティンで外に出ないといけないというかたも中にはいらっしゃいますので、そこを理解した上でサービス提供してくれる事業所があれば成立はすると思います。サービスを使って外出したいのに受けてくれる事業所がなくて困っているという声はそれほど聞いていないので、事業所さんが努力してくださったのと、外出自粛されたかたも多かったんだと思います。また、緊急事態宣言中に外出自粛をし、頑張ってお家族だけで介護をしていたけれども、やはりそれが続くとしんどいという話が出てきたと聞いています。



コロナ禍における障害者市民のくらし

障害のある職員が健常者と共に働くということ

障害者がごく普通に地域で暮らし、地域の一員として共に生活できる「共生社会」実現の理念の下、すべての事業主には、法定雇用率以上の割合で障害者を雇用する義務（障害者雇用率制度）があり、民間企業で 2.2%、国・地方公共団体等で 2.5%が義務づけられています。

箕面市では令和2年6月1日時点で雇用率2.89%、31名の仲間が共に働いています。

◎障害のある職員に聞きました。（複数からの聞き取りをまとめたものです）

●ご自身が市職員になられた経緯を教えてください。

- ・手術をやった直後に就職活動を強いられまして、松葉杖 2 本ついてた状態だったんです。

民間企業に当たったんですけども、どうしても面接で必ず落とされてきました。それで市役所だったら、障害を理由に採用されない、ということはないのではないかと。当時から障害者の別枠採用もありましたので、「障害者を雇わない会社ではない」と思って市役所を希望して、就職しました。

- ・小さい頃から、親から「障害のことを考えて大手企業が役所、できれば箕面市の職員になるように」ということは言われてました。そういう影響の中で実際に大学を卒業して、箕面市役所に就職したかったんですけど採用自体がなかったんです、私の年は。それで民間企業に就職するために大阪を含めて4都府県で就職活動を行ってました。当時、法定雇用率が引き上げられ、雇用率に達していない企業に関しては実名公表もあったので、そういったものも追い風になったんですけど、就職氷河期だったのでかなり厳しく、苦労しました。120社に会社資料の請求と障害の状況を書いた手紙をそれぞれ一通ずつ送って、大体50～60社の面接を受けています。その中で手をあげてくれた会社が3社あって、一番先に手をあげてくれた会社に入りました。その後、市役所の採用試験があったので受験し、悩み抜いた結果、自分に合っていると思った箕面市に転職しました。



●日々の業務の中での課題や困っていること、それに対する希望、または、職場で話し合っ工夫できたことや解決できたことを教えてください。

業務分担

- ・身体障害があるので、やはり物を運ぶことが非常に難しいです。周りも忙しかつたらなかなか頼みにくいのは正直ありますが、「ちょっと悪いけど、これちょっと持ってって」とか言う事は、お願いしています。

内部障害の理解

- ・見た目には分かりにくいですが、内部障害もあって、重複障害なんです。症状としては色々あって、見た目で分かりにくい分、すべてを理解してもらうのはなかなか難しいのが悩みです。

対応事例

- ・前の会社でよかったことは、採用半年後に障害のある社員だけを呼んで、人事課長自ら、「何か職場で困ってることとかないですか？健常者の観点では気づかないことも多々あるんで、色々教えてもらいたい」というふうに言ってくれて、聞き取りがありました。だからそういう意味で積極的に、障害者が働きやすい環境づくりをしてくれていると思えて、すごく安心しました。その時に、セルフサービスの社員食堂が使いにくくて、自分専用のワゴンを用意してもらうことを提案して、了承してもらいました。自分一人で食事を運ぶことができて、気兼ねなく社員食堂を使えたという経験があります。

●障害者雇用促進法の改正や、障害者差別解消法の制定など、状況が変わっていく中で、何か変化がありましたか。あるいは、どんなことを期待していますか。

多機能トイレ

- ・正直、変化はあまり感じていないですが、職場環境の変化で言えば、役所の多目的トイレにオストメイト機能がついたのはすごくいいなと思っています。あとは何かあった時に身体の事を相談できる保健師さんが人事室に採用されたのは、よかったと思います。

バリアフリー

- ・生活している実感としては、街を歩いていて障害のある人をよく見かけるようになったと思います。阪急の箕面線の駅も全てエレベーターがつかましたし、電車の乗り降

りとか駅のスタッフのサポートも確立されているので、車いすのかたが一人で行動できるようになってるなあと思っています。

●コロナ禍によって、障害当事者として受けている影響、変化などはありませんか。

運動不足

- 健常者の場合もそうだと思うんですけど、外出がやっぱり減って、運動不足になっているというのはありますね。私の場合、身体障害があるので体重が増えると影響が出やすいんです。なのでそこは気をつけないといけないと思っています。

表情が読めない

- 私は割と人の顔の表情を見てどう思ってるのかとか、感じてる事とかをできるだけを読み取って、声のかけ方を変えてみたりとか、そういった工夫をしてきたつもりですけども、マスクで口元が見えないというだけで、人間の顔ってこんなに分からないものなのかということを感じて、そこが非常に逆に怖いな、というのはあります。

みんなストレス

- コロナ禍の中で、障害から身体の痛みがひどくなってきて、仕事にも若干支障が出ている時期がありました。周りのみんなに迷惑をかけている部分があるけど、でも、そのことを話し合ったりできないような感じがありました。それはなぜかと言うと、やっぱり全員が何らかのストレスを抱えてる事が心の中にあり、みんな同じ境遇でしんどい思いをしてるのに、なんでお前だけ言いたいこと言うねん、みたいに思われるのではないかという不安っていうのは正直ありますね。我慢を強いられながら生活するのが当たり前という風を感じてしまう怖さがあります。
- 本来行かないといけない病院も、コロナがあるのでちょっと避けていた時期もありました。それから医療行為をするにあたって、念のためアルコール消毒液を携帯してますが、それが不足していた時期があって、個人で用意しないといけないので「もし手元のものがなくなった時どうしよう」と思っていました。



●コロナ禍によって、ご自身や周囲の意識が変わったと覚えることはありますか。

時差勤務制度の活用

- 実は大ありで、何かというところ、時差勤務なんです。身体が痛みがひどくなり始めて、朝起きるのが非常に苦痛になってたんです。朝起きてから2時間ぐらひはずっと服の着替えもできないくらい痛みがひどくて、定時に出勤するのが正直難しくなっていました。当初は2時間休暇で10時45分に毎日出勤してはいたんですけども、頑張ってもうちょっと早く、10時に出勤して6時半に帰るという時差勤務だったら、出勤もなんとかできるし、仕事が終わってから体を休めることも何とかできるギリギリのラインがその時差区分なんです。それを使えるようになったので、体の調子が悪い時に、フレキシブルな働き方をしているんだと、皆の意識が変わってくればいいことかなと思います。これはコロナが収束したとしても、働き方改革じゃないですけど、個々の事情に合わせた時差勤務を柔軟に認められる体制にならないかなと思っています。
- 良い面に関しては、こういう経験をして、アルコールの消毒液を在庫として持っておくべきかなとか、色々経験ができたという点では良かったと思っています。コロナ禍とは違いますが、以前、台風で市内でも停電したことがあったじゃないですか。私の家も停電したんですよ。そういった時に医療行為を電気の通ってない中でやらないといけないうということもありますから、そういったことも事前に想定しておけるという意味では、あれも経験としては良かったかなと思っています。
- 悪い面に関しては、コロナ禍によって、入院がなかなか難しくなっているじゃないですか。なので体調管理をいつも以上に意識しています。帰宅後に体調管理に必要な時間を1〜2時間作らないといけない一方で、残業をしないといけないときもありますし、そのへんのバランスがやっぱり難しいかなと思っています。自分の体調管理が不十分だったり、変化に気づけないうと体調が崩れてしまったり、高熱を出して入院になってしまうこともあります。また、体調不良が繰り返されると命がかかわってしまうこともあるんで、その辺はより注意しないといけなくなりました。



●市職員・市民の皆さん、あるいは後進の障害のある職員にアピールしたいことがあればお願いします。

- いつも思ってるのは、「自分が例えば何らかの原因で障害を負ってしまった時に、仕事を続けますか？」と聞きたいです。「それでもあなたは頑張れますか？」というところで、「あなたが頑張れると思える環境を今作るときましようよ」と健常者のかたには是非言いたいし、「実はあなたの問題なんですよ、あなたがいつ陥るかわからない問題なんですよ」というのは、正直あって。自分も同じような境遇になった時に、安心して働き続けられるような職場環境を作っていって欲しいなということは思ってます。
- 後進の障害のある職員に言いたいのは、とにかく言いたいことは、言ってしまおう。言いたいこと、感じたことは、とりあえず伝えてみるということが大事。今特にコロナ禍で、みんなマスクして、しかも気持ちに余裕がなくて人の事に関心を持てなくて、ということがあると思うので、やはり感じたことをできるだけ早め早めに周りに伝えていくことが大事だと思います。一つ溝ができてしまうと、溝はどんどん広がっていってしまうので、溝を作らないように、できるだけ同じ職場の中で、人間関係をまずつくっていったもらえたらいいんじゃないかなと思います。

障害のある職員にじっくり話を聞くということは、普段なかなかありません。今回お話を聞くことで、様々な気づきを得ることができました。身体障害は目に見えて「段差が不便だろうな」とか「物を運びにくいだろうな」と感じることはできますが、内部障害があったり、痛みがあったり、音が聞こえなかったり…私たちが気がつかない辛さや不便さがたくさんあることを改めて知ることができました。

そういった不便さを改善していくことは、障害当事者だけでなく、周りにいる誰もが便利で、働きやすい職場に繋がっていくんだと実感しました。障害があっても無くても「誰もが幸せに暮らせる社会を築く」というノーマライゼーション、ユニバーサルデザインの視点を職場の中に広げていきたいと思いました。



合理的配慮

障害のあるかたが日常生活や社会生活で受ける、様々な制限をもたらす原因となる社会的障壁を取り除くために、障害のかたに対し、個別の状況に応じて行われる配慮のこと。日本では、障害者差別解消法や改正障害者雇用促進法において、事業者に対して合理的配慮の提供義務が課されました。

当事者は自分が必要とすることを説明し、事業者は可能な範囲で最大限努力する。お互いにとって過ごしやすい環境を作るには話し合いと合意が大切です。

コラム1

健常者と共働する ～自分から発信することの大切さ～

市職員になったきっかけは何ですか？という問いかけに、“両親から言われていた”と答えるひとがいると思います。少なくとも、わたしはそのうちのひとりです。両親になぜそう言うのか？と聞いたときに、「安定しているから」より先に、「障害に理解がありそう」と言われるのは障害者に多いと思います。

市職員になってから1年間が経ち、市役所に入庁する前のイメージは、先ほど述べたように“障害に理解がありそう”でしたが、実際に健常者と共働してきて思うことは、“自分から発信することの大切さ”です。市役所は障害に理解があるとかないとかということよりも、当事者が自らの障害について配慮してほしいことなどを周りの職員に発信していくことで、理解を得られるのです。“障害者”とひとくくりに言っても、障害の種別や程度、配慮してほしいことというのはひとによって違います。わたしは聴覚に障害がありますが、聴覚以外の障害をもつ障害者が求める配慮については詳しくありません。また、わたしは電話ができないため、「聴覚障害者だから電話ができない」と思っていたのですが、他の自治体で働く聴覚障害者で「電話ができる」ひとがいます。そう考えたときに、同じ障害をもつひとでも、求める配慮というのは、“本人にしかわからない”。だから、自分から発信することが大切であると思いました。

これから先、みなさんがどんな障害をもつひとに出会うかわかりませんが、出会った障害者が、“障害者”のすべてではないので、ひとりひとりの“個性”をみてほしいなと思います。



<エピソード>

健康診断のために病院へ行き、受付の看護師さんに耳が聞こえないことを伝えると、耳元で「これできこえますか～」と声のボリュームを大きくして話された。

※聴覚障害には、大きく分けて「伝音性難聴」と「感音性難聴」の2種類あり、声を大きくしたら聞き取れる（伝音性難聴）ひと、声を大きくしても聞き取れない（感音性難聴）ひとがいます。

コラム2

健常者と共働する ～聴覚障害のある職員からみて～

聴覚に障害のあるわたしが健常者の職員と一緒に働くうえで困っていることは、情報をスムーズに得ることができないことです。コロナ禍でもあり、マスクの装着が義務付けられてから、これまで得意としてきた“読唇法（唇の動きを読み取る会話法）”が使えません。職場のひとに、わたしと話すときはマスクを外してほしいとお願いをしました。しかし、読唇法だけで100%わかるというわけではなく、言われたことと、聞き取って理解したつमりの内容が違ふことがたくさんあります。聞いてるうちは、間違えていることに気づかないため、後になって間違いだと分かることがほとんどです。それに対する解決方法の1つに、大事なことはメモにまとめてもらうようにお願いをしています。

これまで以上に円滑なコミュニケーションを図るために、「音声入力機材」を導入してもらいました。パソコンに受信機をつなげ、マイクに吹き込んだ音声を文字としてパソコンの画面に映し出すというものです。電波の状態で文字がうまく出ないときや、誤変換等もしばしばありますが、機材導入前よりも得られる情報量が増え、非常に働きやすくなりました。これも、まわりの理解及び協力のおかげです。

市役所は困っていることに耳を傾けるだけではなく、健常者と障害者が一緒に働くにあたって最善の方法を一緒に考えてくれる職員さんたちがたくさんいます。よく聞く“合理的配慮”について、どこまで求めてよいのかわからない！と思いますが、逆に、健常者からするとどのような配慮をしたらよいのかわからないと思うので、市役所に限らず、障害者と健常者が共働するということは、お互いの“コミュニケーション”のもと成り立つものだと思います。



～取材メンバーから～

職員 A

今回、「コロナ禍における障害者市民の暮らし」について研究に参加させていただきました。障害福祉の担当部署の話を聞いたときに、最も感じたことは、漠然とした不安が健常者のかたと比べ、大きいのかなと感じました。私自身、小さな子どもを含む家族がおり、もし自分がコロナにかかったら、子どもがかかったら、など考えることもありましたが、対処の方法はいくつか思いつくのですが、障害者のかたはそうはいかないということを考えさせられました。

障害の種類、度合い、利用するサービスによっては、本人はもちろん、関わるヘルパーさんが感染、もしくは濃厚接触者となることで、本来受けられるはずのサービスが受けられなくなり、場合によっては生命にかかわる問題ということで、我々からすると想像もつかないような不安にさらされていたことと思います。

とはいえ、行政として完全に不安を払拭できるようなサービスを提供することもできず、対応する職員も困惑しただろうと想像します。こういったときに、いかに対応できるかが、不安を抱える障害者のかたにとっては重要なのだろうと思います。いずれコロナウイルスが落ち着いたとしても、いつ同様の事態が起きるかわかりません。いかに平時のうちに非常時の対応を考えておくかが重要だと感じました。

一方で、オンラインによる対話の環境整備がコロナ禍において進んだことは、障害者のかたにとっても、良いことであったと考えます。これまでは、対面で行っていたことも、それが負担になっていたかたはおられるでしょうし、そういったかたに対して、外出せずとも面談が行うことができる、それが当たり前となった今の状態は望ましいことであるはずです。コロナの対策として考案されたことであっても、有用なことは今後も継続し、障害者のかたが望む手段を選択してもらうことによって、満足度が高められるように思います。

災害に学び、今後に生かすということを市全体で考えてゆければと感じました。

職員 B

東日本大震災の首相官邸での記者会見で初めて手話通訳が付きました。コロナに関する報道の多くで手話通訳を目にし、手話をするときは口の動きが重要なのだと知っていただける機会にもなりました。『聴覚障害＝（イコール）手話』と認識されるかたは多いと思いますが、自分が手話を学ぶようになって、必ずしもそうではないのだと分かりました。障害の原因や程度、障害を負った年齢等によって、コミュニケーション手段は個々によりまちまちで、口話（※）を得意とするかたや、筆談を希望するかたもおられます。今回取材をして、自分が知らないことによる勝手な思い込みや先入観をもつことは多々あるんだろうな〜と、思ったりしました。

誰しも個々に個性を持ち、得意不得意なことはあります。お互いの足りていないところをお互いが認識し支え合う仕組みづくりは、協働していく上において必要で、それは障害のあるないに限るものではないです。そう思うと、障害者と健常者は区別できる別物ではなく、グラデーションとして同じ線上に乗っかっている似た者ではないか、とも思えます。

『阿吽の呼吸』は日本の美学の一つですが、個性豊かなグローバルな時代の今、自分と周りを別の視点から眺めて今の状況をしっかりと認識し、お互いを分かり合うために、十分にコミュニケーションをとることの大切さを学びました。

※口話とは、「聴覚障害者」が「健聴者」の口の動きを読み取り、ろう者が表現したい言葉を「発話」で表す特殊な技術の事。いわゆる「読唇術」の一種。

職員C

“配慮してほしいことは自分から発信する”ことを心がけようと思いました。

わたしは聴覚に障害があるので、聴覚障害者が求めていることはある程度はわかりますが、それ以外の障害を持つ人への配慮に関しては知識が少ないので、これまでにそういったかたに出会った時、どうしたらいいのかな？と思うことがたくさんありました。

また、見た目ではわかりにくい障害者のかたへのインタビューで、どんなことに困っているかを聞かせていただいたとき、教えてもらうまで気づかなかった部分もたくさんありましたので、自分から発信することが大切であると学びました。

職員D

新型コロナウイルスの影響は誰しもが感じていますが、今回の取材で、障害のある方の暮らしへの影響について、具体的に知る事ができました。障害のため、マスクを着用できない人がおられること、マスク着用が義務づけられたため聴覚障害のある方が周囲の方の口の動きが読めず不自由を強いられていること、また透明マスクを着用して介助している通訳の方が、注意されることもあるとのこと。

お話を伺って、今まで気がつかなかった事に気づかされました。

感染の恐怖から、新しい生活様式を守ることが難しくなり、様々な事情を抱える人に対する配慮や思いやりを、社会全体がともすれば忘れがちになっているように思います。

しかし新型コロナウイルスの影響で生活様式が変化した結果、新しい形での社会参加も実現しつつあるようです。オンライン会議の導入などで、外出が難しい障害のある方が在宅で参加できるようになった事例を伺い、今までなかったスタイルでコミュニケーションが取れるようになることは希望が持てる事だと感じました。

今回の経験をきっかけとして、個人として、市職員としても何ができるかという事を考えてまいりたいと思います。

職員E

長引くコロナ禍の影響で多くの方がストレスや不安を感じていますが、障害のあるかたやその家族のかたはより強く不安を感じていたことを、取材を通して実感しました。自分自身も同じような内容の不安が含まれた相談を受けたことがあったので、当事者の思いを再確認しました。すぐに対応することができないことでも、まずはていねいに話を聞くこと、現状を知ることで、今後のサービスの改善につなげていくことを大切にしていきたいと思います。

オンラインを使ったサービスが急速に進んだことが、障害者のかたの活動の可能性を広げたり、時差勤務等は柔軟な働き方につながりそうです。今だけの緊急手段として終わってしまうのではなく、選択肢が広がる形で今後に生かしていかなければならないのではないかと思いますし、障害者のかたに限らず多くのかたの選択肢を広げていくのではないかと思います。



コロナ禍における外国人市民のくらし

箕面市国際交流協会から見た人権課題

(箕面市国際交流協会：MAFGA)

箕面市国際交流協会とは？(Minoh Association For Global Awareness)

小野原西の多文化交流センターで「外国人市民の人権尊重」、「多文化共生社会の実現」、「市民主体の国際化活動の推進」という3つの事業の基本柱に即し、市民のみなさまの参加を得ながらさまざまな地域の国際化事業を実施しています。

主な取り組み

＊外国人市民の人権保障の支援のための取組

日本語教室、相談、子どもの居場所づくり、進路選択の支援

＊市民主体の国際化活動の支援のための取組

＊多文化共生社会の実現に向けた取組：みのおポストの発行など

◎箕面市国際交流協会の職員に聞きました。

【協会から見えている人権課題】

- ・インバウンドが壊滅し、アルバイトで生計をたてていた中国人留学生は仕事がなくなった。
- ・国際交流協会ではお金の貸付などとはできないため、緊急小口資金の貸付などで直接、社会福祉協議会へ（以下、社協）相談に行くケースが見られた。他の機関や窓口でも相談が増えていたかもしれない。相談での窓口対応はとても重要。言語的な障壁や外国人市民が抱える課題などについて、他機関や窓口との連携が課題になっていることを実感した。
- ・わざわざ「相談に来る」ということは、一定以上の困り感をもっているはず。その背景や気持ちを窓口で把握できない、ということは大きな課題。

<エピソード>

ある機関の窓口に来られたフランス語しか話せない相談者。窓口担当者と相談者は日本語と慣れない英語でなんとかやり取りをするが、詳しいことがわからない。そこで担当者は国際交流協会に連絡。こちらで話をする事になり、担当者が相談者にも伝えた。しかし、待てど暮らせど相談者がやって来ない。歩いて来るはずだが、周辺を探しに出ても姿が見えない。やっと電話がつながったので「国際交流協会に来ることになっていたよね？」と尋ねると、「そんなこと言ってた？」と。全く伝わっていなかった…。

【「私が外国人だから…？」と感じてしまうできごと】

コロナ禍以前から日常に差別的に感じられるできごとはあった。



<エピソード1>

自転車レーンが道路の端にできて、そこを走らなければいけないことは知っている。でも、道路のすぐ横なので車が怖いから悪いかなと思いつつ歩道を走っていたら、知らないおじさんに道路側に押されて「あっち！」って怒られてしまった。他にも自転車で歩道を走っていた人はいたのに、私が外国人だから怒られたのかなあ…。

<エピソード2>

A 停留所から C 停留所行きのバスに乗った時のこと。途中の B 停留所で降りようと思ったら、乗ってくる人は OK なのに、降りられない！停まっているのにどうして？「ダメ！」って怒られた。なんとか降ろしてもらえたけど、言い方もすごく怖かった。後から『急行』だから降りられない停留所がある』って分かったけど、もう少し優しく、分かりやすく教えて欲しかったな…。私が外国人だから教えてもらえなかったのかなあ…。

<エピソード3>

コンビニでアルバイトをしている。試用期間は3ヶ月と言われたはずなのに、3ヶ月を過ぎても試用期間が終わらない。同時期に入った日本人アルバイトの人は、もう試用期間は終わっているのに。私に対しては「こんなんも分からんのか」とか「これだから〇〇人は…」とか言われる。これって外国人差別じゃないのかなあ…。

-
- ・地域で働く外国人市民が増えているなかで、差別的な言動や対応を感じている人も増えている。でも、それを誰かに相談したり、「おかしい」と言える人は少ない状況があるのでは？

【感じ方の違い・情報収集の違い】

- ・コロナ禍になり始めた春頃、国によって感染状況・死亡者数・コロナ対策などには大きな違いがあった。死亡者数の多い国出身の人は、毎日母国からの連絡や情報を聞いて、日本の社会的状況に危機感を高めていた。「こんなに人がたくさん死んでいるのに、なぜこんな時に出勤しなくてはいけないのか？」と、納得できず、強い精神的ストレスを感じている人もいた。
- ・大阪北部地震の際、国際交流協会では余震に気をつけながら、翌日から再開したが、「あんな大変なことがあったのに、もう普通にもどるの？」と驚く外国人市民もいた。留学生でも数日後の授業再開に驚く人がいた。
- ・日本人は元々マスクが好きだけれど、国によって文化は異なる。マスクの習慣が全く無い国出身のかたは「私は絶対にマスクはしたくない」「マスクをすると呼気の二酸化炭素を吸うから身体に悪い」という主張。どれだけ話し合っても理解が難しく、「これはルールです」と伝えるしかない場面があった。
- ・同じ事象でも、「情報源」「受け止め方」「どこまで日本語ができるか」「誰とつながっているか」で反応や考え方が大きく異なる。

【労働問題】

- ・飲食店などで働いている人たちは本当に困窮している。
- ・近年、全国的にベトナムからの技能実習生が増加しているが、母国で受けた説明と異なる雇用条件や劣悪な環境といった問題が指摘されている。
- ・また、一部のベトナム人の犯罪報道があると、ベトナム人全体がそのように見られるのではないかと感じ気持ちも落ち込む。
- ・現在、「海外から働き手を受け入れる」という流れが、政府や産業界によって進められており、地域で働く外国人市民が増えているが、現在の施策は「安い労働力を期間限定で使う」というものになっている。この発想では、地域でも人と人の対等な関係、共生社

会づくりには逆行した意識や関係になってしまう危険があるのではないか。

- 同じところで働いている人同士なのに、部署がバラバラだったり、雇用期間がずれていたり、異動が多かったり、結果として（連帯できない）仲良くなれない事例がある。
- コロナ禍での休業要請。休むにあたっての保障もないまま「一週間休んで」と言われた、という人もいる。そうでなくても、言葉や文化の違いで外国人市民は理解できないことが多いのに、説明がどこまでできているのだろう。
- 技能実習生は基本的に単身で来る。子どもなどを通して地域とつながる機会が乏しい。長時間の労働というなかで、どうやって地域とつながってもらえるのかが課題。

【「外国人」と言っても…】

- 「外国人」とひとくくりにしがちだが、多種多様で、くくれない。例えばこれまで長年日本で働いてきた外国人のなかには、新たに外国人がたくさん日本に来ることに対して「私たちの仕事を取りに来た」という感情を持つ人もいる。

【定住者は地域を支えている】

- 国際交流協会では、外国人市民は「支援を必要とする人」であるだけでなく、その力を地域で活かしてくれる「地域の担い手」と考えている。日本語教室のアドバイザーや、多言語での生活相談員、comm cafe(コムカフェ)のシェフ、小学校での多文化理解プログラム講師など、様々な場面で活躍してもらっている。



コロナ禍における外国人の暮らし

外国人市民インタビュー

◎箕面市在住の、外国人市民のかた7名に聞きました。

Aさん



ニュージーランド出身
日本在住1年半
日本の文学、言語、美術などが大好き

Bさん



メキシコ クエルナバカ市出身
日本在住1年半
日本の文化、言語、食べ物、お寺巡りが大好き

Cさん



韓国 ソウル出身
オーストラリアにも7年在住
日本語の響き、歌舞伎、能、武士、和室、着物などが大好き

Dさん



ベトナム ホーチミン出身
交換留学生で来日歴あり
13年前来日
comm cafe でベトナム料理の腕をふるうことも

Eさん



スロベニア出身
英会話教室講師(母国語はスロベニア語)
日本在住14年

Gさん



ベトナム出身
留学生
1年半前来日

Fさん



中国出身
留学生
5年前から日本在住 春からは大学院生

箕面市には令和3年2月末時点で、
全市民の2.1%にあたる2,918人の
外国人市民がおります。



●日本に来る前と来てからの日本についての印象を教えてください。

Aさん：日本に来る前は、よく聞くのは日本人は丁寧、日本は静か、日本は安全。来てから「うん」と思いました。はいそうですね。でも気付いたのは丁寧イコール優しいわけでもないですね。ニュージーランドは結構人がフレンドリー。でも、日本はレジとかスーパーで丁寧ですけど、そんなに話してくれない。でもニュージーランドだったらスーパーに行って、レジの人は絶対色々しゃべってくれます。元気ですか？今日はいい天気ですね。今日何を作りますか？パスタ作りますか？とかそういう話をしないといけないですね。でも日本に来て初めてスーパーに行った時、何も話してくれなくて「あれ？」と思って「私のこと嫌い？何これ？」と思いました。

Bさん：私は5年間日本の企業で働いてから印象が変わりました。働く前は、日本人はすごく真面目で、仕事に集中していてあまり話さないと思っていました。でも、一緒に働いてみて、仕事が終わってから食べに行ったり、遊んだりしました。真面目だけではないですね。それから、日本人はみんな空手ができると思っていたけど、違っていました。また、毎日みんな着物を着ていると思っていました。私が日本人に対して思っていたイメージも、日本人がメキシコ人に対して思っていたイメージも、実際に会うとお互いに変まりました。

Dさん：ベトナムにいたとき、その時はネットの時代ではないから、日本は戦争が終わってすごく発展して、日本人は勤勉とかそういう情報はたくさん入って、ベトナム人で、日本に行きたいという人すごく多いと思います。日本に来て、日本は忙しいなと思いました。ベトナムで仕事が8時から5時までとか、9時から6時までで、休憩はきっちり1時間取って、仕事する間はちょっとゆっくりしておしゃべりしても、おやつ食べても全然問題が無いです。日本に来て、きっちり仕事しますが、休憩のときも休憩ができない。だからすごく忙しい。それから、ベトナムの子育てだったら、おばあちゃんとおじいちゃんとかがサポートしてくれて。日本だったら、女性が全部やるじゃないですか。仕事もするし、子育てもするし、家事もして、全部で3つのことをやっていて、すごく自分の時間が無いと思います。



Eさん：夫は日本人だから、最初は彼から文化を少し学びました。日本に来た時には日本語、全然できなかった、0（ゼロ）だったです。子どもたちは0ではなかった。ひらがながなんとなく読めましたが、絵本を見て、子どもと一緒に遊んで絵本の日本語の言葉を少し覚えましたが、でも、話すのは全然できなかった。日本に来たときにそれが大きな問題になるとは思わなかったですね。英語が話せるから大丈夫と思っていた。でも、それでは何もできなかった。ショックで、日常生活をどのように回すのかすごく悩みました、子どもたちも小さかったし。買い物も主人と一緒にしか行かない。ほとんどが家の中に、引きこもりみたいに子どもたちと家の中で過ごしました。



Fさん：日本に来る前に、日本はどのような国か想像しました。国はキレイだし、みんな優しいし、礼儀正しい。先進国だから、生活の水準が高いということを想像しました。日本に実際に来て、今まで5年間経って、日本はキレイな国だけど、汚いところもあります。日本のかたもやさしい、礼儀正しいかたもたくさんいますけど、そんなに礼儀正しくない、ちょっと荒い人も実際に見ました。先進国だけど、給料が高い人と給料の低い人の貧富の差がやっぱり見えます。今の本音は、人によって違うのだと思います。優しいかどうか、礼儀正しいかどうか、人によると思います。



Gさん：私が日本に来る前に持っていた印象としては、日本人が冷たくて、あまり相手に迷惑をかけたくないとか、絶対に先に話しかけない、だから自分が話しかけないと友だちができないとか、正直あまりよい印象ではなかったです。でも、実際に来てみたら、全然冷たくないです、親切な人もたくさんいます。私がゴミの捨て方が分からないときは、近所の人詳しく教えてくださって、紙に英語と日本語を両方書いてくださって。私もびっくりしたんですけど。あと、道路を守る。ほんとにルールを守る。私も日本に来て守れるようにがんばりたいと思います。

●日本での生活について疑問に思っていることや困っていることはありますか。また良くするためのアイデアがあれば聞かせてください。

Aさん：一応日本語がまあまあ話せるからそんなに問題とかはないと思うんですけど、日



本の電気でも携帯でも、書類が多すぎてわからないから、たまに困ることはあります。例えば携帯代は口座引き落としにしないので、振り込み用紙が届きますけど、変更するための電話をしたくないんですよ。電話は緊張しますし、思っていることは全部伝えられないんです。電話をしたら、相手が早く対応して、終わって、次の人に行きたい感じがして、伝えたいことが全部はうまく伝えられないことがある。一年半経っても電話はしてないです。

それから、直接行かないといけないことが多くて、なんでインターネットできないの？ってよく思います。特に行かないといけないところ、運転免許とか。あ、それは、ニュージーランドでは20分で切り替えできます。インターネットではできないんですけど、行ったら20分でできますし、週末にも開いてます。日本は平日しか開いてなくて、遠いし、年休とかを使って行かないといけない。ウェブサイトに必要な書類が乗ってて、私、同僚に確認してもらって、全部持って行っただんですけど、着いたら「あ、これも必要ですよ」って言われて。でもネットに載せてないんですよ。「でも必要です」って。それから箕面に帰ってきて書類を用意して、また年休取って2回目行きました。結局そういうところが多くて、やり方もわからないですし、日本語しか書いてないし、英語とか多言語とかはないですし、Webサイトも使いにくいから、それは結構困ります、私でも。このくらい話せても。ウェブサイトは日本語だけでした。そして日本語があんまり話せない人は、通訳者と一緒に行かないといけない。だからあまり話せない人と一緒行って、通訳しました。スタッフに英語が結構できた人もいましたけど、それでも「日本語が話せないと来ちゃ駄目ですよ」って言われます。

多言語か、やさしい日本語※もなかったし、ウェブサイトのデザインも、誰でも使いやすいものではない。今の時代、デザインできる人も多いので、もっと分かりやすくできると思います。外国人のためだけでなく、日本人のためも、やりやすくした方が、職員にとってもお客さんにとっても良いと思います。



やさしい日本語

1995年の阪神・淡路大震災をきっかけに生まれた、外国人にも理解しやすい日本語です。難しい表現や抽象的な言い回しなどは避け、小学校2、3年生で習得する漢字とひらがなやカタカナで表現します。

例) 公共交通機関でお越してください。→ ^{でんしゃ}電車や ^きバスで ^き来て ください。

Bさん：日本人は外国人の顔を見て、どこの国の出身か、見分けにくいかもしれません。



外国人の顔を見たら、すぐに英語圏のかたと考えるようです。でも、日本に住んでいる外国人は200カ国以上の国から来ていて、話す言葉はそれ以上の数の言語があります。外国人が英語を話すことができるかどうか、一目では判断ができません。みんなは「あ、英語!」と思っても、もちろん話せる人と話せない人もいます。

また、日本人は電車で外国人を見たら、ちょっと離れる。なんでそういうことをするか分らないです。外国人の周辺に幅広く空いてる席があっても、離れている狭い席に行き、外国人の側に座らないようにします。こういうことは何回も見たことがあります。

Cさん：日本で生活しているうえで大変なことは毎日あります。傷つけられたりということ



とはたくさんあります。例えば私は一人でタクシーには乗りたくありません。なぜかという、夫と一緒に乗るときと、私一人で乗るときの態度が全然違う。誰も見ていない限られた場所で、態度がはっきり違いますね。タクシーに乗らないといけないときは歩いて行ったりしてます、嫌だから。最初は敬語を使うんですけど、私が外国人だと分かった瞬間、敬語を使わない。だから、タクシーを含め、夫と一緒にいたときのその態度があまりにも違うから、できるだけ日本語をしゃべるのを控えるときがあります。態度が違うその瞬間が嫌だから。

Dさん：私は特に困ってないです。差別の件はあんまり聞いてないです、私の知り合いで



も。職場で、日本人と一緒に仕事をしていて、ベトナム人は結構一生懸命働くから、みんなにかわいがられるので差別はあんまり聞かないです。他の友だちも差別は受けていないです。でも、留学したときはちょっといじめられた時がありました。嫌なことを言われたり、自分の仕事を押しつけられて…とか。

Eさん：上の息子が2年生の時に下の息子が保育園に入りました。下の息子が全然日本語



ができなくて、入ったときは保育園の先生から、「お母さん、日本語やらなかったら日本語話せないよ」「日本語勉強して」「日本語やって」って言われて、ものすごくしんどかった。でも、ずっと日本に住むと分かっていたので、子どものために少しずつ、自分の言語を忘れて、日本語だけでサポートしました。大変でした。言葉が通じないので、どのように説明する？子どもが泣いてるのに、どのように日本語で、彼にシチュエーションをどう説明したらいいか？しんどかった。

上の子が小学校に入った時は、サポートシステムがまだ無かったです。その時は学校のサポートがなく、私に任されました。子どもが日本語をあまり話せなかったので、周りの子から少しいじめられて、先生のプレッシャーも強かったので、学校をあきらめないために、どのようにモチベーションをあげるのか。スロベニアの学校のシステムと日本の学校のシステムが違うので、私の文化や考え方と、先生たちの考え方が結構ぶつかりました。その時私は、先生も忙し過ぎて、生徒さんたちがいっぱい一人ずつはサポートできないと感じました。スロベニアでは教室には最大25人です。日本に来たら40人いたんですね。子どもは2年生に転入して漢字もあまりできないのに、先生は「みんなと一緒に！」に覚えて欲しい。「みんなと一緒に！」に動いて欲しいという。それは絶対できないと私は思っているのに、「やらなかったら次の中学、高校には入れない」って。最初はちょっと許して欲しかったのに、それができないのが日本のシステムですね。

スロベニアは、外国から来ている子に1年与えて言語を学ぶことを許してる。宿題のことも許してる。ベースを作る1年を許してる。その後は少しずつ普通になっていく。だから子どもも、周りも慣れるために時間を使っている。このサポートが違う。私はそれが普通だと思っていたので、日本にはそれが無かったですね。



学校での日本語支援について

現在は、箕面市では日本語支援の必要な子どもたちに対して、日本語指導担当教員等による授業への入り込み支援や個別での支援、放課後等日本語教室、懇談会などでの保護者のかたへの通訳など、様々なサポート体制をとっています。

Fさん：外国人差別とかあります。日本人から、「私は外国人だ」と知ったら、日本人と違



うやり方があります。私が外国人だから例えば、お店に行った時に外国人だから何でもいいし、そのサービスの質を日本人よりちょっと下げたかなあと思うときがありました。一番印象に残るのは、2019年の年末、まだコロナがそんなになかった頃、両親が日本に遊びに来る時、私は大阪のホテルを予約しました。チェックインの時にホテルが、ネットで載せた写真とだいぶ違うので、両親は泊まりたくなかった。話し始めたらすぐに私が外国人だとバレますね。私が外国人だと言うことで、相手の態度もすごく悪くなるし、私も「なんでそんなに違いますかね」、「ネットではこんなにキレイな部屋だけど、実際は汚いし部屋の匂いもありますし、嫌だ」と言うと、相手は「もう予約したからどうしようもない」って。私はすごく怒ってキャンセルした。相手がすごく大きい声で「キャンセルしても料金を返済しないよ」って。私はどうでもいいと思って、夜、8時9時くらいに、家族と一緒に他のホテルを探しました。一番怒ったのは、めっちゃでかい声で私に話してきたこと。私は客なのに、なんで私にそんな態度をして、とすごく怒った。外国人だから、観光客だと思われた。

Gさん：私はしゃべらないと外国人に見られることが無い。だから電車に乗る時もあるべ



く日本語をしゃべらないです。私には中国人の友だちがいて、彼女は中国人であることを他の人に知られたくない。だから、二人の中国人が電車に乗ってもがんばって日本語で会話する。ちょっと白い目で見られるのが嫌で。私はそれができないです。ベトナムの友達と喋る時は日本語でしゃべると違和感があります。

●コロナの影響で困ったことや苦労したことはどんなことですか。

Aさん：情報の流れが分からないです、日本の政府からの情報が、はっきりしないとか。



日本語でも英語でも曖昧な言葉が多くて、今回の緊急事態が延びたでしょ？「延びるかもしれない」とか、「今日は決めません」とか。はっきり延びるって、どこに書いてました？それは困ります。

そして政府からの情報はどこ見たらいいかわからないです。バラバラすぎて、全然統一してないし、県によるルールも違いますし、その県の中の市によるルールが違いますし、こういうパンデミックとかウイルスに対応したら、もう全員皆

同じ行動しないのは不思議だと思います。情報がはっきりしてないから、みんなどうすればいいかわからない。それは外国人でも日本人でもそうだと思います。

個人的に困ったことは、ニュージーランドに帰れないこと。私、日本に来て、こんなに長く帰れないと思わなかったです。今ニュージーランドに帰ることにしたら、2週間ホテルに泊まらないといけないんですけど、それはお金がかかります。21万円だから払えないんですよ、飛行機の便もそれもって。そして年次有給休暇も足りないです。また日本に来て2週間（外出）自粛だから、一か月年休はもうホテルに。だからもう無理。3ヶ月ぐらいはニュージーランドに飛行機とか全然飛ばなかったんです。それもすごくメンタルの負担になりました。もしニュージーランドで何かあったら、誰か亡くなったら、病気になったら、怪我したら、また地震とかあったら、帰れないです。自分の国に住んでいなくても、「飛行機があるから、何かあったら1日以内に帰れる」と考えると心強くなりますけど、それができなくなると怖いです、正直。

4月に海外に行った日本人は日本に帰ることができましたけど、その時に海外に行った永住者とか、日本のちゃんとしたビザを持ってる人達も帰ることができなかった。なんで？ちょっと理由が分からない。その後ルールが変わって外国人だったら、PCR検査を受けてから入る。でも、多くの国でそんなに簡単にPCR検査をできなかったのに、日本はそのルールを作ったんです。日本人だったら検査なくても入れましたが、外国人も感染するかもしれないですけど、日本人も感染するかもしれないです。誰でも感染するのに、それは結構ショックでした。私だけじゃなくて日本にいる外国人全員が、20年住んでも30年住んでも永住者でも、観光客と一緒にという扱いをされました。それは結構メンタルの負担になりました。ニュージーランドに行けたら日本に帰れないとか、大変でした。

Bさん：一番困ることは家族に会うことができません。できるだけ毎日テレビ電話をしたり、メールをしたりします。でも、メキシコと日本の時差は14時間なので、時間を合わせるのは大変です。私は家族と電話するため、夜11時とか夜中まで待ちます。夜に電話をすることがきない場合、早く起きて電話します。



去年の11月ぐらいに家族の近親者が新型コロナウイルスのせいで亡くなりました。40代でした。私に連絡があった時、不安で緊張しました。日本では一人

で暮らしているのに、何かが起きたらどうしようと思っていました。逆にメキシコで何かが起きても行けません。とても不安です。

Cさん：韓国まで1時間半くらいなのに帰国できないのはすごく辛いですね。こんなに行



けないとは思わなかった。ストレスが溜まっています。

友人たちはしんどいです。去年3月に留学生だったんですけども、修士課程の子たちは、普通に日本に帰ってくるつもりで旧正月もあって3月に帰るんですけど、コロナで帰って来れないじゃないですか。普通に日本に帰ってくると思って、銀行の解約とか、クレジットの解約とかせずに行ったんですよ。バタバタしてて、片付けが多くて。でも日本に帰れないから、解約ができない。「ここに本人が来ないと解約できません」とか銀行が言うから。そういう相談を私は聞いています。これは、自分の責任じゃない。コロナと日本の政治的な問題なのに、不利になったら自分の責任になる。それをちょっと伝えたかったです。留学生たち、帰ってしまった彼らの立場を守ってあげるための何かを作らないといけないと私は思っています。本人じゃないとだめっていうのが多いですね。

Dさん：去年、お母さんが日本に遊びに来たんですよ。それがコロナで帰れなくなったん



です。来たのは2月、その時はまだ飛行機が飛んでたんですよ。2月いっぱいいて、3月中旬くらいに飛行機が止まったんですよ。だからチャーター便を何回も申請しましたが順番が回らなくて、8ヶ月後に帰りました。知り合いの人も、ベトナム人だけど日本のかたと結婚して親に会いに行って、日本に戻れなくなった。

あと、違うところで実習生の面倒見る仕事してるんですよ。帰国できない、お仕事が満了。コロナで帰れなくなって、お給料が無いじゃないですか。でも生活費が毎月かかるので、生活が大変で、それで相談されて、私が色んなところに聞きます。福祉とかで、困っていたら、食材をくれたりとか、給付金が2万円もらえるとか調べて紹介します。

Fさん：大学の授業はオンラインになりました。リモートの一番の問題点は、やっぱりネ



ットが不安定だから、先生が何を言っているのか分からなくて、もしテストにその内容が出たらやばいなあと思って。友だちに会えない寂しさもありました。寮に住んでいるかた以外、外国人はほぼ一人暮らしだから、学校も行けないし、ほぼ毎日家で授業を受けて、寂しさがありました。それから、百貨店でしていた通

訳のアルバイトは減りました。

中国のお正月は2月くらいで、毎年の春節に中国に帰って家族と一緒に過ごします。今年は特別で日本にいます。やっぱり帰るなら時間もかかりますし、お金もかかりますし、コロナに感染する可能性もありますし、やっぱり日本で我慢するのが一番かなって。

Gさん：私は1年生なので、大学の授業はすぐリモートで、元々対面だったら、授業があって、みんな一緒に食堂とか行って、しゃべって友だちになるんですけど。授業が終わって、オンラインをみんなすぐ退出して、それで終わり。友だちができないです。日本に来たばかりの頃は、5ヶ月間予備校だったので。入学式も先送りになって、今年の4月に私たち1年生と、今年の1年生と一緒に入学式に参加します。

それから、帰れないです。春休みはちょうどベトナムの旧正月だから、帰るつもりだった。でもコロナが急に。2021年になって大体収まるかなと思ったんですけど実はもっと厳しくなって、結局帰れなくなって、今はちょっと暇です。暇すぎて、いろいろ考えてイライラして…。もしベトナムに帰ったら隔離されないといけない。15日。あと日本に戻ってまた隔離されないといけない。そのお金は全部自分で払わないといけないです。

●コロナの影響で外国人であることで理不尽な扱いや差別・偏見を感じたことはありましたか。

Aさん：今は日本にいる外国人が少ないから、いつもより目立ちます。だからいつもより 気を使ってます。喉が渴いても電車で水飲むとかはしません。結構周りの人にいつもより見られる気がするから、すごく気を使ってマスクを全然外さないようにするんです。夜は散歩をしたり運動したりしてますが、誰もいなくてもマスクをすることにしています。たまに電車に乗る時とか、ずっと見られることもあります。外国人あんまり見たことないのか、私のこと知ってるか、なんで？とか結構あります。私は旅行してると思われることがたまにありますが、「いや、私箕面に住んでますよ！」「大阪に住んでますよ！」と思います。空港が閉まってから結構ずっと、「あ、観光ですか？」って聞かれました。誰も入国できないですよ

ね。来れないんで「住んでますよー」と答えることが半年ぐらいずっとありました。

Eさん：人が私に近づかなくなってしまったのはあります。買い物に行く時には、もちろんディスタンスはそうですけど、それ以外で。私が買い物をする場所にはみんな行かない。それはありました。コロナの前はなかったですけど、今は離れてます。イギリスの新しいウイルスが流行っているんで、顔を見て怖い？と思ってるのかな。顔だけで見てたら分からないのに。メディアのポピュリズムがパニック状態を作っているんで。もうちょっとロジックで考えるようにしてほしいです。

●コロナの影響で大変なことがたくさんありましたが、良かったと感じたことはありますか。

Aさん：ニュージーランドについての海外でのイメージがもっと良くなって、それは嬉しいです。ワクチンに対してみんなすごくお金とか時間とか、努力していたのはすごいと思います。科学的にもいいことですね。

Fさん：よかったことはコロナの関係で、オンラインが普及しました。学校でもそうだし、病院でもオンラインで事前に予約するし、スーパーで支払うのも電子マネーでいけたり、前より使うお店も多くなったし、これはいいかなと思います。

Gさん：やっぱりコロナの時にテレワークが盛んになって、色んな人が自分の強みを活かすことができて、例えば主婦が家にいて、育児しながら仕事ができる。子どもが寝た時に隙間時間で仕事ができる。直接会社に行かなくてもいいのは、コロナが収まった後もテレワークは役立つと思います。

Cさん：オンラインでのお仕事。私は子どもが3人いるんです。大阪市内で韓国語を教えているんですけども、箕面から行くのは大変ですが、オンラインでのレッスンで授業ができるから、家で育児をしながら、時間にしばられなくて。日本ではコロナ前はオンラインにすごく抵抗感があったじゃないですか。「実際じゃないと」っていうか。それが無くなった。オンラインで仕事をする動きがあり、カルテを書くのが全部オンラインでするのを会社が工夫したり、そういうのがすごく嬉しいです。手で字を書かなきゃいけないのが、オンラインのサイトに行って、レッスンのカルテを書くとか、すごく便利になりました。

あと、幼稚園の発表会とか運動会の親の行列、並ぶのがすごいじゃないですか。それが今年からクラスごとの発表会になって、時間が決められました。じゃあ、それで並ばずにのんびりと見られたのが、ほんとにいいことだと思いました。競争しなくていい。幼稚園の園長先生も、これからはこういう方法にしましょうかって。先生たちもお父さんお母さんも楽。それはいいことだと思います。

Eさん：ポジティブな面を考えたら、仕事がオンラインに変わりましたので、私にはすごく楽になりました。ほんとにありがたい。今は自分の時間も増えて、休み時間が増えましたので、家族という時間が増えました。自分でしたいことができるので、スロベニアの生活に戻りました。スロベニアで昔住んでいたように、国のおうちに戻った雰囲気。前は本当にプレッシャーが多くて。働くだけ。人生は働くだけ。学校だけ。それ以外はない。家族の時間も、自分がやりたいこともできないし。今、チェンジのチャンスです。違う考え方が入って、今は簡単に変わることができるので。それはひとつのいいことです。

●今後、感染症や自然災害が起きたときに、どのようなサービスや仕組みがあれば安心できると思いますか。アイデアや気がついたことがあれば教えてください。

Aさん：やっぱり日本の政府に、災害とかこういうパンデミックとか緊急事態とかあったら、一つの緊急ウェブサイトを作って、情報とか全部のせて欲しいんです。いろんな言語でも日本語でもやさしい日本語でも。探しやすい、ひとつの使いやすい場所に、正しい情報を全部集めてほしいです。

Eさん：今コロナのことの、インフォメーションが少ない。全部日本語で書いてるので。あそこにはまとめ、英文とかある方がいいかな。スロベニアで考えたら、メディアはまとめたインフォメーションだけ出している。一つのインフォメーションにまとめたらいいかなと思います。このケースがあった、これがありましたって。これくらいができるよ。まとまっていたらわかりやすいかな。日本語が読めない外国人は、英語バージョンがないと、グーグル通訳しても変な英語が出てくるので、何言っているか分かりません。

Bさん：説明に絵とか図とかがあったら、分かりやすくなると思います。言葉が難しくても絵や図で分かることもあります。日本人には必要ないかもしれないけど、外国人のためにやさしい日本語があるといいと思います。あと、情報が多すぎるので大事なことだけ分かりやすくしてほしいです。



Cさん：不便だと思ったのは、パニックになってデマとかが流れると、箕面でもトイレトペーパーとか食料が買えないことがありました。車で並んで、それを見たら雰囲気すごく怖いと思うんですよね。日本の人には慣れている風景かもしれないけれど、外国人から見たら、戦争の前みたいに感じた。そういう時に、誰かがスーパーの前に出て何かできないのかなって思うんです。



Dさん：箕面市国際交流協会は、私やベトナムのスタッフがいて、職員はベトナム語の他にもいろんな言語が使えます。例えば箕面市に住んでいる外国人には、住民票などの手続きの時に、パンフレットでMAFGAのことを教えていただけたら、困ったらすぐに連絡できると思います※。ここの場所が知られていないので、ここが分かったら、相談ができるし。ベトナムの留学生と実習生の場合は、会社か学校が代わりに情報提供してくれるんですよ。分かっていたら大変な時にすぐ対応ができます。



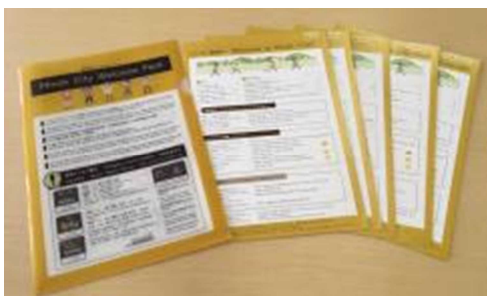
ウェルカムパック

2020年4月から箕面市では転入手続きに来られた外国籍市民のかたに、「ウェルカムパック」をお渡ししています。

箕面市で生活するために必要な情報を、英語、中国語、韓国・朝鮮語、ベトナム語、インドネシア語でお知らせしています。

※箕面市ホームページでもご覧いただけます。

※印刷された冊子が欲しいかたは、文化国際室（市役所別館3階）、箕面市国際交流協会（多文化交流センター）でお渡しすることができます。



ホームページはこちらからアクセスできます

ひとくちに、「外国人」といっても「長く日本に住んでいる」「日本に来たばかり」「日本語の習熟度」「見た目」「つかう言語」「文化」など、それぞれ事情が異なり、困っていること、問題だと思っていることは一人ひとり大きく違っていることを、インタビューを通じて改めて実感しました。

日本語特有の表現やあいまいさから、正確な情報がスムーズに伝わりにくい実情があり、「やさしい日本語」を使うなど行政をはじめ、社会全体の協力が必要です。

メディアについては各国で発達の度合いや傾向が大きく違い、情報を一元的に伝える国、テレビのバラエティ番組など情報があふれる国、インターネットの書き込みで徐々に世論が動く国など様々です。どの国のメディアの状況やコロナ対策が良い悪いということではなく、命に関わる情報については、グローバルに通用する共通の基準を必要としているのではないかと思います。

私たちは、「英語は世界共通語」というイメージから、外国のかたと「英語で話さなくては」という思いこみがあったり、何か聞かれても、英語や外国語では十分に答えられないという不安から、意識せず外国のかたと距離を取ってしまったり、敬語は難しいだろうと、わかりやすいように「やさしい日本語」を使ったつもりが、外国のかたには「横柄な態度」に映ったりします。日本人にとって「何気ない行動」だったとしても、差別だと感じることもあるのだと、みなさんの話からよくわかりました。

差別だと感じることは不利益と同時に心理的な影響も与えます。外国のかただけではなく誰にでも広く当てはまることですが、無力感から他のこともあきらめたり、やる気を失うなど、意欲の格差が生まれてしまいます。ひとつの障壁がより大きな格差につながってしまう…コロナ禍は、日本社会の持つそうした側面をより顕在化させているのかもしれない。

外国人市民の中には、幼稚園や学校で多様な文化を子どもたちに伝えたり、通訳や相談員、防災アドバイザーなど、その力を発揮して地域を支えているかたもいます。

目の前の「その人」のことを知る、知ろうとすることから始めれば、どんな言葉で話しかければいいのか、何を必要としているのかが、わかってくるのではないのでしょうか。まず、お互いに知り合おう、と誰もが思えるようになればいいなと感じます。

この箕面市を誰もが住みやすいまちにするために、共にアイデアを出し合い、できることから進めていきたいと思います。



～取材メンバーから～

職員F

今回、取材にあたりコロナ禍における外国人のかたに取材させていただきました。私自身の担当業務の中で外国人のかたと接する機会がなかなかなく、普段どのような環境、心情の中で生活しているかもわからなかったこともあり、日本との文化の違いで苦慮する部分が知れました。

まず第一に私が感じたのは、箕面市におけるコミュニティやサポートが外国人のかたにとって、生活面や心情面でよりどころになっているのだと感じました。言語も通じず、コミュニケーションがなかなかとれない中で、コミュニティに参加することで同じような境遇のかたと接することができ、気持ち的に楽になるのだと感じました。

また、コロナ禍における外国人についてですが、コロナにおけるインフォメーションの取り方がメディアでしかなく、メディアでの意見も様々で「いったいどうしたらいいのかわからない」といった意見がありました。私達行政においてもコロナ禍における情報発信も方向性を示していく必要があると改めて感じました。行政としてもなかなかコロナウイルスにおける発信に時間がかかることもあり、外国人のかたは情報収集が難しいこともあることから、情報発信ツールを増やしていくことも重要だと考えます。仕事がなくなり収入が減ったりと不安な部分も多く、行政としてどのようにサポートしていけばいいのか考え、発信していくことにより外国人のかたの不安も少しずつ取り除いていけるだろうと感じました。

職員 G

私が今回お二人のかたに取材させていただいた感想ですが、お二人があまりにも対照的だったのが印象に残っています。

お一人目のかたのお話の中で、「旦那様がいないときと、お一人の時の接客態度の違い」というお話を聞いたときは正直ショックでした。未だにその類いの対応があるのかと……。受け取り方は様々だとは思いますが、自分がそのかたの立場で考えると、外出することに二の足を踏むかなあと思いました。家の中では、3カ国語（英語、韓国語、日本語）での会話だと聞いて懂れました。リモートで習い事を受けるのが楽になったという話も印象的でした。

対照的に、お二人目のかたは全体的に、「あんまり差別や不都合を感じたことがない」とのこと。お二人の違いにもまた驚きでした。

職員 H

何らかの理由があって以前から日本に住んでいても、外国人という見た目の問題で、“観光客”と決めつけられることがあると聞いた時、それは差別的であると思ったのと同時に、わたし自身も知らず知らずのうちに、差別をしていた可能性があるかも…とハッとさせられました。

また、コロナ禍で、自由に出身国に帰ることができなくなって困っているという話は聞いたことがあったのですが、身内の不幸があった時に駆けつけることができなかったという話を聞いて、心苦しくなりました。

ご自身のプライベートな部分も含まれる貴重なお話を聞かせていただき、誠にありがとうございました。人権問題について学ぶ機会というのはなかなかないと思うので、こういった冊子をとおして、色々なかたに人権問題について学んでいただけたらと思います。

職員 I

現在箕面市には、永住者、特別永住者、民族学博物館の研究生や大阪大学の留学生、先生とその家族等100か国近い外国のかたが暮らしています。また2019年4月の出入国管理及び難民認定法改正の後には、技能実習生が増加しています。

コロナ禍ということもあり、今回取材が出来たのは日本語による日常会話に支障のないかたたちばかりでしたが、日本語の理解が難しいかたもたくさんいらっしゃると思います。そんな方々はコロナに関する情報をどれだけ収集できているのか？挨拶を交わしたり日々の生活の困りごとなどを相談できる友達や知り合いのかたは身近にいらっしゃるのだろうか？と気になります。どこに問い合わせをしたらいいのかさえも分からなかったり、役所は敷居が高く行きづらいと感じている人も多いと聞きました。外国人の現状や情報を行政よりも把握できているMAFGAには、その存在の大きさと、個々の目線と視野で行政を見ることの原点を改めて教えていただいた気がします。

皆さんのお話を伺って、市民の皆さんに箕面のグローバル化の現状を認識していただき、自分の身近な近所や学校や職場に外国人がいるのが当たり前で、多様性を受け入れ認め合い共生していくことが、誰もが心豊かに暮らせるのだと、伝えていきたいです。また、急速に進むIT技術を上手く活用しながら、行政と関連機関同士のスムーズなネットワークの構築と連携、更なる多言語での情報発信や翻訳機能等わかりやすいホームページづくりが必要とも感じました。

大阪万博から半世紀が経ち、グローバル化の波は加速度を増しています。多様な民族や多様な文化に触れられることは、今後益々箕面の豊かな財産となりえます。行政職員である前に1人の人間として、これからも国籍や民族、その方の背景に関わらず、知り合いのかたや今後出会える外国の方々との草の根交流を育み紡いでいきたいと思っています。

職員 J

今回、小野原の国際交流センターで、外国から日本に來られて仕事をされている方々の意見を直接うかがう機会をいただきました。

日本における韓国系の外国出身の方々への偏見は根強いものがあるのだなという事を再認識させられました、また、彩都で働いているかたからは、安価な労働力として、収入を得ておられる方々も多く、市をまたいだ施策や案内が必要だと感じました。街作りの段階から、生活のサポートや、コミュニティのサポートについて、考慮しておくべき内容だと感じました。

お二方とも、非常に流暢な日本語でしたが、これくらいの方々ですら、日本では、まだまだハードルがあるのだなと実感した次第です。今回の経験を生かした施策が一つでも実現できるように留意していきたいと考えさせられました。

職員 K

まず何よりも多くの外国人市民のかたにお話が聞けたことが大変楽しく、興味深かったです。インタビューに協力してくださったかたと関係者のかたに感謝です。そして今回強く感じたのはお互いに話をする事の大切さでした。意識していなくても、外国人のかたに対して自分が持っているイメージや思い込みに気づかされる事がたくさんありました。当たり前のことですが、各国、各個人それぞれ違いますが、つい「外国人」とひとくくりにしてしまいがちです。また、私たちの何気ない言葉や行動が悲しい思いをさせてしまっているという声もありました。もし自分が同じ立場だったらどう感じるか、という視点に立つことを忘れないようにし、今後の仕事に役立てたいと思います。人それぞれの違いを楽しめる、違いがみんなを豊かにする市になるといいですね。

コラム3

新型コロナウイルスの3つの顔を知ろう！ ～負のスパイラルを断ち切るために～

新型コロナウイルスによる感染症は、世界中で感染の拡大が続いている状況です。

この感染症は、“3つの顔”を持っており、これらが“負のスパイラル”としてつながること、更なる感染の拡大につながっています。

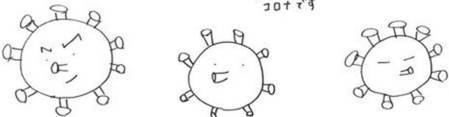
日本赤十字社作成の「新型コロナウイルスの3つの顔を知ろう！～負のスパイラルを断ち切るために～」から、この“負のスパイラル”を知り、断ち切る方法を考えてみてください。

日本赤十字社
Red Cross Japan

新型コロナウイルスの 3つの顔を知ろう！

～負のスパイラルを断ち切るために～

新型コロナウイルス



1

ウイルスがもたらす
**第1の“感染症”は
病気そのものです**

このウイルスは、感染者との接触でうつることがわかっています。

感染すると、風邪症状や重症化して肺炎を引き起こすことがあります。



4

新型コロナウイルスによる感染が流行しています。

ワタシには3つの顔があるふっふっふー

実はこのウイルスが怖いのは、「**3つの“感染症”**」という顔があることです。

知らず知らずのうちに私たちも影響を受けていることをみなさんにご存知ですか？



2

ウイルスがもたらす
**第2の“感染症”は
不安と恐れです**

このウイルスは見えません。ワクチンや薬もまだ開発されていません。

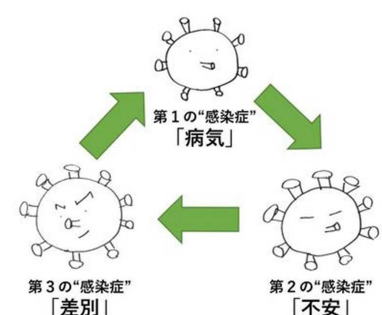
わからないことが多いため、私たちは強い**不安や恐れ**を感じ、ふりまわされてしまうことがあります。

それらは私たちの心の中でふくらみ、**気づき力・聴く力・自分を支える力**を弱め、瞬間に人から人へ伝染していきます。



5

**3つの“感染症”は
つながっている**



3

ウイルスがもたらす
**第3の“感染症”は
嫌悪・偏見・差別です**

不安や恐れは人間の生き延びようとする本能を刺激します。

そして、ウイルス感染にかかわる人や対象を日常生活から遠ざけたり、差別するなど、人と人との信頼関係や社会のつながりが壊されてしまいます。



6

なぜ、嫌悪・偏見・差別
が生まれるのか

見えない敵（ウイルス）への不安

特定の対象を見える敵と見なして嫌悪の対象とする

嫌悪の対象を偏見・差別し遠ざけることでつかの間の安心感が得られる

△△地区は危ない
××人だ、危ない
咳をしているあの、コロナかも

本当の敵を見なくなる
敵がすり替わってしまう
敵はウイルス

7

第2の“感染症”に
ふりまわされないために

不安や恐れは私たちの
気づく力
聴く力
自分を支える力
を弱めます。

不安や恐れは身を守る為に必要な感情ですが、私たちから力を奪い、冷静な対応ができなくなることもあります。

12

特定の人・地域・職業などに対して「危険」「ばい菌」といったレッテルを貼る心理によって差別や偏見はおこります。

△△地区は危ない
××人だ、危ない
咳をしているあの、コロナかも
マスクしてないなんてありえない
〇〇の職業は危ないらしい

差別の場が育っていくよ

危険は被害の子は想像しないでほしい

生き延びようとする本能
特定の対象をウイルスと間違える心理
感染への不安・恐れ
ウイルスを遠ざけたいという心理

8

第2の“感染症”にふりまわされないために
気づく力を高める

まずは自分を見つめてみましょう

- ・立ち止まって一息入れる。（深呼吸、お茶を飲む）
- ・今の状況を整理してみる。
- ・自分自身をいろいろな角度から観察してみる。（考え方、気持ち、ふるまいなど）

自分の心にザ・ザラザとあててみる

13

3つの“感染症”は
どうつながっているの？

負のスパイラルで“感染症”が広がる

①未知なウイルスでわからないことが多いため不安が生まれる

②人間は生き延びようとする本能によりウイルス感染にかかわる人を選ざける

③差別を受けるのが怖くて熱や咳があっても受診をためらい、結果として病気の拡散を招く

第1の“感染症”「病気」
第2の“感染症”「不安」
第3の“感染症”「差別」

この“感染症”の怖さは、病気が不安を呼び、不安が差別を生み、差別が更なる病気の拡散につながることで。

9

第2の“感染症”にふりまわされないために
聴く力を高める

いつもの自分と違う所はありませんか？

- ・ウイルスに関する悪い情報ばかりに目が向いていませんか？
- ・なにかと感染症に結び付けて考えていませんか？
- ・趣味の時間や親しい人との交流が減っていませんか？
- ・生活習慣が乱れていませんか？
- ・普段と変わらず続けられることはありますか？

14

皆さんも、ウイルスに関する悪い情報ばかりに目が向いていたり、なにかとウイルスに結び付けて考えたりしていませんか？

「あの人が咳してる・・・コロナなんじゃない」「あの地域はコロナが流行っているからあそこものを買うのはやめよう・・・」「熱があるけど怖いから黙ってよう・・・」

このように思い、行動することから“感染症”は広がっていきます。

これらの“感染症”をふせぐために、私たちはどのような工夫ができるでしょうか？

うーん、むずかしい

10

第2の“感染症”にふりまわされないために
自分を支える力を高める

自分の安全や健康のために必要なことを見極めて自ら選択してみましょう

- ・ウイルスに関する情報にさらされるのを制限し、距離を置く時間を作る。
- ・いつもの生活習慣やペースを保つ。
- ・心地よい環境を整える。
- ・今自分ができていることを認める。
- ・今の状況だからこそできることに取り組んでみる。
- ・安心できる相手とつながる。

お散歩しよう

15

第1の“感染症”を
ふせぐために

1人1人が衛生行動を徹底しましょう。

「手洗い」
「咳エチケット」
「人混みを避ける」

など、ウイルスに立ち向かうための行動を、自分のためだけでなく周りの人のためにもすることが大切です。

手洗いしっかし
ハチマキ

11

第3の“感染症”を
ふせぐために

不安を煽ることは病気に対する偏見や差別を強めます。

- ・「確かな情報」を拡めましょう。
- ・差別的な言動に同調しないようにしましょう。

コロナのやつ出ていけ！
そうだ！

16

編集後記

◇『新型コロナウイルスの影響』を知りたいという思いで障害者市民、外国人市民にスポットを当てて、今年度の取材を進めてきました。

◇「コロナの影響」をお聞きする予定が、結局は日々、「障害者市民として」「外国人市民として」感じておられることをたくさん聞かせていただくことになりました。「コロナの影響」の前に、これまでの積み重ねがあることを、みなさんのお話から実感するインタビューとなりました。

◇コロナ禍において不要不急の外出が制限され、人と会うことができない中、なんとかして交流をもつために世界的に急速に「オンライン」が普及しました。諦めるのではなく、「できる方法を考える」。ピンチをチャンスに変えられた例のひとつだと思います。

◇今までは障害のために会議や講座に出席できなかったかたが、自宅に居ながら参加することができるようになったというお話もありました。もちろん、オンラインで全てをカバーできる訳ではありませんが、選択肢が増えた、人々の意識が少し変わった、ということは大きな変化だと思います。

◇まだまだ制限は多いですが、「よい変化」は逃さず、コロナが収まった後も、有効に活用していければと思います。

◇今年度はとてもたくさんのかたにインタビューにご協力いただきました。ご協力いただいた皆さまありがとうございました。



箕面市人権宣言

わたしたち、みのる市民は、みどり豊かなわたしたちの街を、よき愛で愛しています。この街に住み、この街で暮らすすべての市民が、だれよりも、この「人権」を踏みしめられ、涙をこぼすことがあつてはならないと願っています。わたしたちは、そのために、引きも切らずに続く「人権」を否定することを、しっかりと向き合、それをなくすために行動したいと考えています。このように、愛すること、願うこと、考えること、行動することは、みのる市民のたからかな誇りです。わたしたちのために、あなたのために、みんなのために、人権の街みのおを育てます。日本国憲法のこころ、市民の風で、ここ箕面市を「人権の街」として宣言します。

平成五年（一九九三年）十二月二十日

箕面市

箕面市非核平和都市宣言

真の恒久平和は、人類共通の願いである。

しかしながら、近年、世界において軍備の拡張は依然として続けられ、世界の平和に深刻な脅威をもたらしていることは、極めて憂うべきところである。

わが国は世界で唯一の核被爆国として、再び広島、長崎の惨禍を繰り返させてはならない。平和なくしては、明るく豊かな生きがいのあるまちづくりは保障されない。

よって、箕面市は、平和を愛する人達が集うまちとして、日本国憲法にうたわれている平和の理念に基づき、非核三原則の完全実施とあらゆる国のあらゆる核兵器の廃絶を訴え、ここに非核平和都市であることを宣言する。

昭和60年3月28日

箕面市

☆編集スタッフ・人権行政研究会

＊箕面市人権行政推進本部会議のもとに設置

＊①人権担当と各部局の連携強化、②職員の人権意識の把握・向上、③人権課題に関する市内での実態把握 ④人権情報紙の作成・編集その他、を目的として活動

印刷物番号

2-22

令和3年(2021年)3月

編集：箕面市人権行政研究会

(事務局：箕面市人権文化部人権施策室、

箕面市教育委員会事務局子ども未来創造局人権施策室)

発行：箕面市人権文化部人権施策室

〒562-0015 大阪府箕面市稲1-14-5

TEL.072-724-6720 FAX.072-725-8360

Email. jinken@maple.city.minoh.lg.jp
